

会 議 名	第4回板橋区教育ビジョン2035検討委員会
開 催 日 時	令和7年1月7日(火)午前10時から午前11時53分まで
開 催 場 所	区役所北館第二委員会室
出 席 者	【委員】天笠委員長、笹井副委員長、児美川委員、倉斗委員、三枝委員、高田委員、安彦委員、伊藤委員、本間委員、木村委員、長沼委員、林委員、雨谷委員 【事務局】 教育総務課長事務取扱教育委員会事務局参事、学務課長、指導室長、新しい学校づくり課長、学校配置調整担当課長、教育施設担当課長 生涯学習課長、地域教育力推進課長、教育支援センター所長、中央図書館長
欠 席 者	【委員】豊田委員
会 議 公 開	公開
傍 聴 者 数	0名
次 第	1 報告 (1) 前回の検討委員会の振り返り 2 協議 (1) 「子どもの学びや成長を支える人や環境の充実」について (2) 「生涯にわたり学び支え合う教育の推進」について
配 布 資 料	資料1 前回の振り返り 資料2 「子どもの学びや成長を支える人や環境の充実」について 資料3 「生涯にわたり学び支え合う教育の推進」について
会 議 概 要	1 報告 (1) 前回の検討委員会の振り返り 事務局より資料説明を行った。 2 協議 (1) 「子どもの学びや成長を支える人や環境の充実」について 事務局より資料説明を行った。 協議冒頭、倉斗委員より資料「学校建築の『これまで』と『これから』-主体性を育む学校-」をもとにご発言いただいた。ポイントは次のとおり。 <div style="border: 1px solid black; padding: 10px; margin-top: 10px;"> <ul style="list-style-type: none"> ・ 2020年の学習指導要領改訂とGIGAスクール構想により、学校の環境面での見方が大きく変化した。新しい学習指導要領では「どのように学ぶか」が明記され、アクティブラーニングという学び方が重視されるようになった。 ・ 現代社会の多様化と不確実性の増加に対応するため、主体的に学ぶ力が重視されている。学習指導要領で学力観が広く謳われ、知識や思考力だけでなく、学びに向かう力や人間性、コミュニケーション能力も含まれるようになった。 ・ 個別最適な学びと協働的な学びを実現するため、学習環境の多様化が求められている。ICTの導入により、授業形態も変化し、伝統的な一斉授業から、一つの授業の中でそれぞれが主体的に学び、異なる活動が混在する「多様な学習」が既に起こっている。 ・ オンライン授業の効率性が認められる一方で、対面授業の価値も再認識された。特に、授業の合間の雑談や他の生徒の成功・失敗を目にする経験は、オンラインでは得難い貴重な学びの機会である。Hybridな時代において、偶然同時多発的に見て、聞いて、知ることができる体験に価値が非常にあると考える。 ・ 文部科学省の報告書では、学校中が学びの場となることが提唱されている。主体的な学びを可能にするのは、学習環境の選択肢の多さであると考えられる。 </div>

- ・ 従来の教室は一斉授業に適したオーダーメイドの空間であったが、多様な学習活動に対応するには柔軟性に欠ける面があった。そこで、flexibility だけでなく、子どもたちが主体的に選択できる「selectability のある環境」づくりが重要となる。
- ・ これからの学校施設は、学び方（環境や場所、姿勢、仲間、時間など）を選べる、多様な選択肢のある環境づくりが求められている。

【主な意見】

- ・ 新しい学習環境の導入に期待を感じつつも、いくつかの懸念がある。自由な学びの場の提供は良いことだと思うが、従来の授業形態にも利点があると考ええる。社会性の育成やマナーの重要性が失われないか心配である。多様化と規律のバランスを取ることが大切だと感じる。
- ・ 新しい学校環境においても、規律や規範の重要性を考慮する教師の意識改革と子どもの成長を重視し、地域と連携した社会教育の場としての施設をめざすべきだろう。また、一見無駄に見える空間の有用性を認識し、そのような場所の設置を提案する。
- ・ 教科教室型の学校は、子どもの主体性を育む環境として評価する。しかし、生徒の自由と安全管理のバランスが課題である。教員の目が届く範囲での自由を認めつつ、生徒の信頼と管理の両立に苦心している。基本的にはこの新しい教育環境に賛成だが、教員が不在になる場所での事故リスクを想定した運用が課題である。
- ・ 新しい学校施設は素晴らしいが、従来の学校のイメージとは異なる印象を受ける。新しい教育環境について、我々はもっと理解を深める必要があると考える。
- ・ 板橋区は学校施設の先進的自治体と認識している。全国的に老朽化が課題の中、板橋区はソフトとハードの融合を重視した長寿命化対策を進めている。長期的視点で、板橋区のこれまでの蓄積を活かしつつ、新たな課題にどう向き合うかの検討を求めたい。
- ・ 授業以外の経験や失敗の重要。教員の危機管理は大切だが、見守る人材が不足している。地域の介入や、教員・生徒・地域住民が交流できる共有スペースの設置が有効だろう。これにより、学校と地域の連携が強化され、空間の活用が改善されることを期待する。
- ・ 学校は地域で子どもを育てる場であり、共創の時代には地域全体が関わるべきだと考える。信頼関係が重要なキーワードであり、プラスのスパイラルを生み出すことが大切。環境づくりでは、互いに信頼し合える関係性を構築するきっかけを作ることが重要だろう。

(2) 「生涯にわたり学び支え合う教育の推進」について

①生涯学び・活躍できる環境の整備

笹井副委員長より、資料「これからの生涯学習・社会教育に求められるもの」をもとに、ご発言いただいた。ポイントは次のとおり。

- ・ 学びのスタイルには、一人で学ぶ、仲間と学ぶ、専門家から指導を受けるの3つがある。社会教育は特に「仲間とともに学ぶ」ことを重視している。
- ・ 社会教育の本質は、他者との建設的な関わり合いを通じて成長し、価値を創造することにある。
- ・ 今後の社会教育は、小規模で多様な人間関係、バーチャルな関わり合い、フラットな関係性、総合的かつ個別的な課題設定が重要になる。
- ・ 社会教育のプロセスには、他者との接触、対話、情報共有、議論、協働実践などの段階がある。各段階に応じた条件整備やファシリテーションが必要である。

- 学校と地域の連携を深め、社会教育専門職員の役割を重視することで、より効果的な学びの環境を構築できる。

事務局より資料3の説明を行った。

【主な意見】

- コミュニティ・スクール委員として、地域と学校の連携に携わる中で、生徒会との交流を通じ、現代の中学生の素晴らしさを実感している。地域との繋がりを継続的に持つことが重要。様々な体験の機会を提供し、地域と学校が密接に連携していくことが大切だと感じている。
- 地域や社会への関わりにおいて、企業は給与が動機付けとなるが、町会やPTAは無償であり、参加の意義が見出しにくい。若い世代の参加を促すには、単なるきっかけづくりだけでなく、参加の必要性を深く理解させる取組が重要。教育委員会や企業を巻き込んだ意見交換の場を設け、ボランティア精神だけに頼らない新たな参加促進策を検討すべきと考える。
- 町会やPTAにおける世代間ギャップが若い世代の参加を妨げている。長期在任者による組織の硬直化も課題。新旧の考えをうまくミックスし、新しい風を入れる必要がある。働く母親の増加により、時間的・精神的余裕がなくなっていることも参加を難しくしている要因。社会全体の理解と支援が必要だろう。
- 全世代の参加・参画が課題であり、その具体化が必要だろう。また、不登校児童のネットワークへの繋がり方も重要な論点。社会教育や学校教育の従来型の考え方と現状のずれを認識し、次世代を見据えた新たな教育のイメージ図を描く必要がある。
- 9ページの間人中心のイメージ図は、利用者の視点に立った効果的な表現だと評価する。若い世代は地域活動に無関心ではなく、目的が明確で自分たちの意思が反映される活動には積極的だ。従来の枠組みにとらわれず、参加者の意義を重視した人間中心のつながりが重要と考える。生涯学習も含め、活動の目的に共感できる仕組みづくりが必要。
- 区民の教え学び合いのイメージは素晴らしいが、実現には課題がある。学校は既に多くの団体と連携し、子どもの健全育成を目的に活動している。この新しい構想の目的と中心となる主体が不明確だ。学校にはこれ以上の余力がないため、社会教育のあり方を含め、共創の時代に向けた具体的な議論が必要。
- 学校の教員には既に多くの業務があり、これ以上の負担は難しい。しかし、地域の方々が、学校のオープンスペースで子どもと交流し、そこから学びが生まれる可能性はある。そのためには、学校空間の拡張や、公民館や図書館との複合化など、新たな発想が出てくる。現状の学校に全てを集中させると、学校機能が破綻してしまう。
- 学校教育と社会教育の区別が現実的でなくなっていることに賛同する。さらに、子どもと大人の区別も再考すべきだ。子どもは単に支援される存在ではなく、地域社会で役割を持ち、大人と共に課題解決に取り組める。この相互作用を通じて、子どもも大人も成長していく。2035年に向けたビジョンには、この柔軟な考え方を盛り込むべきだ。
- ジュニアリーダーの活用を提案する。仲町地区では63名のジュニアリーダーが活動中で、野外教室や子どもお楽しみ会の企画・運営を担っている。町会長との連携を強化し、ジュニアリーダーの経験を将来の地域貢献につなげることで、地域の担い手を育成できると考える。

②読書活動の充実と「絵本のまち板橋」の推進

事務局より資料説明を行った。なお、中央図書館長より、大人の読書活動の現状と課題について追加説明を行った。

【主な意見】

- 読書推進には図書館や書店の空間的価値が重要。オンラインでは得られない偶然

	<p>の出会いや体験が本への親しみを深める。子どもの本の帯作りなど、身近な人のおすすめが読書のきっかけになるだろう。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 図書館は単なる本の貸出施設ではなく、多様な人々が集い、互いに刺激を受ける場である。民間でもこのような場を創出することが重要だ。読書会など、共に読書し感想を共有する機会は、人々を盛り上げる。個人学習だけでなく、読書を通じた集団的な学びや刺激の共有がより重要になるだろう。 ・ 図書館や書店での偶然の出会いが重要だと感じる。子どもたちは本好きだが時間がない。専門の学校司書の全校配置を希望する。ビブリオバトルや POP 作りなど、成長に合わせた読書の推進方法を教員が学ぶべきだ。また、大人向けに読書履歴を記録できるシステムがあれば楽しいだろう。 ・ 中学校の不読率は高く、図書委員会を中心に対策を講じているが改善が難しい。電子書籍の導入も効果は限定的だ。授業での本の利用も減少し、端末利用が増加している。学校図書館の充実が重要だが、司書不在で開館日数が限られ、生徒が図書室に行く機会が少ないのが現状である。 ・ 本を借りやすい環境づくりが重要だ。日常生活の合間に気軽に読書できる場所や機会を提供することで、読書習慣の形成につながると考える。 ・ 子どもが本を読まないのではなく、読めない可能性を考慮すべきだ。環境づくりは重要だが読解力の問題も無視できない。特に小中学生時代は、読書を諦めさせないよう読解をサポートする人材やツールの提供も必要だろう。 ・ 「絵本のまち板橋」に加え、「読書のまち板橋」も政策にしてはどうか。両方を掲げることで、読書活動の充実を図れると考える。 <p>③文化財の保存・活用 事務局より資料説明を行った。なお、生涯学習課長より、区の現在の取組状況について追加説明を行った。</p> <p>【主な意見】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 郷土資料館や史跡への興味を喚起するには、単なる展示では不十分だ。体験型や専門家の解説は魅力が増す。特に若い世代にどのようにしてんでもらうかを考えると、施設維持や活用方法を根本から見直す必要があるだろう。 ・ 小学校では社会科見学や地域探検以外で郷土資料館等に行く機会は少ない。人気の博物館は、体験型や効果的な宣伝がなされている。子どもに魅力が伝わる仕掛けを積極的に展開することが重要だろう。 ・ 中学校では「板橋を語る会」の一環で板橋めぐりを実施し、郷土資料館や神社仏閣を訪れる。 ・ 板橋第一小学校の 150 周年を機に、郷土資料館の学芸員による特別講演を実施した。学芸員の魅力的な話で板橋の歴史を学ぶ機会を設けた。このような取組は効果的だと考える。 ・ 史跡めぐりのパンフレットをもっと活用すべきだと考える。また、七福神めぐりの期間延長を提案したい。 ・ 資料 3 の 9 ページに、博物館や美術館、図書館などの施設を位置付け、地域全体で施設を活用し、教育環境を向上させる新たなイメージ図の作成を検討してはどうか。 ・ 区民が教え学び合う循環の実現イメージ図の作成には、共通のテーマ設定が重要だと考える。全団体共通のテーマは難しいが、地域や学校にとっての意義を示す上位概念が必要だ。地方創生の観点から地域を上位概念とする自治体の例もある。行政主導でプラットフォームを構築し、機能させることが求められるだろう。 <p>3 事務局より事務連絡 事務局より、次回の日程を連絡した。</p>
所 管 課	教育委員会事務局教育総務課計画係